



スタディ・ルーム

中野 智章 (中部大学民族資料博物館 館長)
※中部大学国際関係学部長・教授



高校生に体験授業を実施する中野館長(中央)
中部大学第一高等学校連携講座 2025年7月11日

欧米では日本で「博物館」や「美術館」と呼ばれる施設が「ミュージアム」の一語で括られていることをご存じの方は多いと思いますが、一方で「博物館」は知識の獲得、「美術館」は鑑賞が主な目的の場といったまことしやかな説明が時になされることについては、違和感をお持ちの方も少なくないように感じます。

事の発端は明治から大正に掛けての近代化政策の中で、当時流行していた博覧会的な要素を「博物館」に、それまで知られていなかった西洋美術を「美術館」という施設で公開したことに端を発するようですが、言う

までもないことながら、知識も鑑賞も片方のみの施設に限られるものではありません。

近年では博物館や美術館における教育普及活動が進み、展覧会とのコラボレーション企画などが目を惹きますが、欧米の「ミュージアム」にはその多くに「スタディ・ルーム」と称する部屋が設けられています。

この「スタディ・ルーム」の「スタディ」は「勉強」ではなく「研究」の意味で、ここは主に休館日にあたる月曜日などに所蔵品の実見観察や研究を行うために用いられます。小職もかつてパレスチナ地域からエジプトに

輸入された前3,000年頃の土器を調査した際には、毎週ロンドン大学の博物館に通い、世界的な研究者として知られる学芸員の先生が1点1点土器を部屋まで運んで下さるのに大いに恐縮し、また感激したことがありました。それは大学院生で留学中の時分でしたが、学部生の頃にエジプト行きの途中で訪れた大英博物館では、「スタディ・ルーム」の存在を知ってはいたものの、質問はあってもたどたどしい英語ではそもそも却って失礼ではないかなどと気後れして、扉をノックする勇氣すら出ませんでした(現在は事前予約が必要です)。(次頁へ)

索引

- ◇巻頭
1 「スタディ・ルーム」
中部大学民族資料博物館長・国際関係学部長 教授 中野 智章
- ◇2 「南インドの旅」
中部大学民族資料博物館副館長・応用生物学部 環境生物科学科 教授 大場 裕一
- ◇2025年度 活動報告
- ◇実技講座
3 2025年度 特別講座(古典絵画)開講
課題制作「古典技法の現代作品への応用～創作作品制作」
日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員 下川 辰彦
- ◇企画展
4 2025年度秋季企画展
「中部大学国際関係学部 創設40周年記念展
～私とフィールド、私のコクサイ」
中部大学国際関係学部長・教授 中野 智章
同教授 中山 紀子
同教授 伊藤 裕子
同准教授 宗 婷婷

- ◇ギャラリートーク
7 2025年度秋季企画展関連
ギャラリートーク
中部大学民族資料博物館 原田 千夏子
- ◇企画展
8 特別講座(古典絵画)2025年度受講生作品展
—古典技法の現代作品への応用—
中部大学民族資料博物館 原田 千夏子
- ◇教育普及活動
9 CAAC 授業「旅と文学」内見学解説
主なグループ見学報告
- ◇施設利用
10 学習スペースの新設について
2026行事案内

館に所蔵される資料のかずかずは、さまざまな見かたを通して新たに「発見」されることや、再評価されることも少なくありません。学芸員にとって

は重要な休日であることも多い月曜日ですが、外部から来られる研究者と語り、資料を前に議論したり、情報交換をしたりする一時もまた貴重

な機会となります。弊館も大学付属の「ミュージアム」としてそうした「研究」面も大切に、整備を進めていきたいと思う次第です。



インドのヒンドゥー教寺院訪問時の大場副館長

南インドの旅

大場 裕一

(中部大学民族資料博物館 副館長)

※中部大学蝶類研究資料館 館長

中部大学応用生物学部環境生物科学科 教授



私は発光生物の研究をしていますので、地元の若い学生に「ホタルを見たことある？」と聞いてみました。そうしたら、みんな「見たことはある」とのこと。「どんな色で光ってた？」と質問したら、「ちゃんと見てないからよくわからない」。日本では初夏になるとみんなホタルを見に出かける文化があるんだ、という話をしたら、「わざわざ見に行くものじゃない、ただのムシだ」と笑いながら言います(ちょっとショック)。そういえば、ホタルに関する論文でインドから発表されたものって、ほとんど見たことがありません。私のホタルに関する講演も、イマイチ反応が薄かったような。

一方、学会発表の中にトラの保全に関する研究報告があったのですが、そのときの質疑応答には驚きました。「では、何か質問がある方は…」と座長が言ったとたん、かつて見たことがないほどものすごい数の手が上がったのです。インドではホタルは愛されていないけれどトラは愛されてるんだなあ、と、国が違えば生物学も違うことに気が付かされました。

中部大学民族資料博物館では、発光生物と人との関わりをテーマにした企画展を今秋に開く計画をしています。題して「発光生物のエスノバイオロジー」。ある生き物がどのように我々の日常に受け入れられている

のか、また、その土地の文化がどのように生物を受け入れてきたのかは、国や時代やそこに暮らすローカルな民族ごとにも大きく異なっています。それはなぜなのか、そこにどのような意味が隠されているのか？そのありさまの一部を、私の専門である「発光生物」という視点で、私が個人コレクションしてきた発光生物にまつわる文化資料と当館収蔵の民族資料を使って読み解いてみたいと思います。果たしてその目論見はうまく行くでしょうか。ぜひこの秋の企画展にご来場ください。

(左上の顔写真についてのコメント)

ヒンドゥーの寺院を訪れたら、男は上を脱ぎなさい、と注意されました。ちょっと恥ずかしかったんですが、写真を見るとなぜか馴染みますね。僧衣のように見えますが、着ていたポロシャツを肩にかけているだけです。額には寺院でもらった灰(ビブーティ)を付けています。自分で付けたのでちょっとズレてますね。

4
2025 月

1
2026 月

実技講座

2025年度 特別講座（古典絵画）開講 課題制作 「古典技法の現代作品への応用～創作作品制作」

Ⅵ 期間 Ⅵ 2025年4月30日(水)～2026年1月21日(水)

Ⅵ 場所 Ⅵ 中部大学10号館106Jゼミ室

受講者数：16人（有料・定員制・通年）

指導講師：下川 辰彦（日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員）

担当：原田 千夏子（中部大学民族資料博物館）

2025年度の本講座における課題制作は、これまでの応用編と位置づけ、創作作品に伝統的な技法を応用する手法を中心に紹介する機会とした。

日本画で用いる和紙や絹絵などの基底材や絵具は、その特質から様々なアプローチができる素材である。伝統的な技法を現代の材で置き換えながら工夫できる点も多々ある。

私も作家活動のなかで試行錯誤を繰り返しながら見出してきた。今回はこれまで自身の作品制作で試みた表現法の一部を、前期と後期に1点ずつ作品を制

作する工程のなかで行うことにした。日本画に対する古い固定観念をやわらげ、さまざまな表現方法を自由に描き手が編み出していったよいのだということ传达了かったからである。

例えば、簪水の扱い方の応用としては、本紙の表面だけでなく裏面からも彩色を行い、作品を多視点でとらえて配色を考えたり、本紙に木目をかたどりその模様を活かす方法など、画面全体で色面を作り、モチーフの形態表現に重層的な彩色効果を表す工夫など、形と色の両面から画面に深みをもたせる表現手法について

とりあげた。

これらの工程は、単にマニュアルに添って行えばよいものではない。また、単純に経験年数に応じて確実に成長できるか、というものともいえない。特に色彩を扱う描き手の感性は、自身で感受する意識を保ち続けなければ、画面に現れる表現は即座に鈍くなってしまう。

今回の講座では、特にこうした表現上では、これまでより一段階進んだ、造形感覚への意識づけについてより認識する意義を声に出していくよう心掛けた。（下川）



特別講座の教室風景
（左写真・中央、右写真・右が指導講師の下川辰彦先生）



11
2025 月
|
12
2025 月

企画展

2025年度 秋季企画展 「中部大学国際関係学部 創設40周年記念展 ～私とフィールド、私のコフサイ～」

Ⅵ 期間 Ⅵ 2025年11月1日(土)～12月22日(月)
Ⅵ 会場 Ⅵ 中部大学民族資料博物館 シルクロード室
附属三浦記念図書館1階エントランス

主 催：中部大学民族資料博物館
協 力：中部大学国際関係学部

出品点数：37点
入場者数：1,264人



2025秋季企画展ポスター

研究資料を出品した教員のコメント

「私のフィールド、私のコフサイ」展を終えて

中 野 智 章

中部大学国際関係学部長・教授
※中部大学民族資料博物館 館長

今日、国際関係学部には所属する学生の大半はコロナ禍の折に中学や高校生活を送った人たちです。当時は人びとの行き来が世界的に途絶えてしまったことで、国際系の学部に対する関心も落ち込んでしまい、本来は世界各地の状況を反映して行うべき教育の中身も、他大学と同じくオンライン中心にならざるを得ませんでした。平日の昼間にも関わらず、学生の声も聞こえないガラんとしたキャンパスを歩いた際の何とも言えない不気味な静けさは、今なお忘れることができません。

あれから数年が経って国際人気が回復の兆しを見せ、本年度は学部入学者も予想を上回る大人

数となりましたが、世界情勢が不安定な現在では、いまだフィールドに出ることができない教員も少なくありません。そのような状況ではありますが、学部創設40周年ということでこれまでの歩みを振り返りつつ、歴代の教員が収集した館所蔵の資料も用いて今後の教育や研究のあり方を考える企画展としました。

苦心したのは、展示スペースに対してどのように構成を組むかで、20名近い教員のうち、今回は4名の教員による調査や研究を紹介することになりました。「トルコ・文化人類学（中山紀子）」「エジプト・考古学（中野智章）」「イギリス・文学（伊藤裕子）」「中国・音楽人類学（宗

婷婷）」の各教員は学問分野やフィールドも大きく異なりますが、他大学のコフサイではなかなか得られないであろう学びの一端を紹介することができ、新たな気づきが多く産まれた次第です。

トルコブースでは調査地となった村の様子をどのように探ったのかといった研究の裏側を、イギリスブースでは文学と芸術を交えて研究を進めるご様子を貴重な書籍や雑誌等からそれぞれ垣間見ることができました。そして中国ブースでは教員所有の楽器を通して音楽から探る文化や社会の一端を感じることができ、エジプトブースでは文字や遺物から探る古代文明の世界を紹介しました。

会期中には大学祭などの催しもいくつか重なったため、学部事務室に保管されていた創設以来の写真やパンフレット、教員の著作などはキャンパスを訪れた卒業生の方々にとっても懐かしい展示となったようです。今後も文理医教8学部の学びや研究などを所蔵品と絡めて紹介する展示を企画し、総合大学における学びの豊かさをお伝えできればと思います。



1階エントランス展示風景

「恩師の恩は海より深い」

中山 紀子

中部大学国際関係学部教授

去年に続いて今年もフィールドワーク資料を展示することとなった。今年は単独ではなく4人という複数の教員によるものだったが、他にも今回は立派な図録が作成されるという違いがあった。図録に載せられたトルコ衣装やスカーフなど私のフィールドワーク資料は、フィールド地であるトルコの村の四季の写真とともにセンスあるレイアウトのおかげで見違えるように見栄えがするものとなった。心より感謝したい。

さて、ここに記そうと思うのは、今回図録に載らなかった展示資料についてである。衣装やスカーフ以外に私は本を2冊と研究資料を2枚展示した。2冊の本とは、トルコの村をフィールドワークし

て書いた博士論文『農村女性からみたトルコの「近代化」：世俗主義、イスラーム、女性の相互関係』（総合研究大学院大学提出）をもとに2年後に出版された自著『イスラームの性と俗：トルコ農村女性の民族誌』（アカデミア出版会、1999）と、その22年後にトルコで出版されたトルコ語翻訳である。Köy Kadını, Modernite ve İslam: Bir Antropoloğun Gözünden 1990'ların Türkiye'si. (2. Baskı) Tarih Vakfı Yurt Yayınları, 2021. (『村の女性、近代、イスラーム：ある人類学者がみた1990年代のトルコ』第2版、歴史財団ユルト出版社、2021)。トルコ人の読者に届けられることになった念願の出版であった。

一方、残りの研究資料2枚は軽いが本に劣らず思い出深いものだった。2枚のうち1枚は、フィールドワークをした村の地図である。人口477人、家屋85戸（1993年当時）の村を自分の足で回って家屋の配置を記録した手書きの地図である。もう一枚は村長の部屋に残されていた古い人口台帳とそれをもとにした家系図の写しの一部である。私が手書きで書いているためかなり見にくい、私の調査にとって何よりも重要な資料である。しかし私はその重要性に自分で気づいたわけではなかった。展示の際に書いた解説文を紹介したい。

「フィールドワークを始めてしばらくして指導教官の松原正毅先生がトルコにいらしたので首都アンカラに会いに行った。そのとき人口台帳は見たのかと一喝され、あわてて村に戻り昔の人口台帳を入手して大量の家系図を描いて不足の情報を求めるべく各家を訪問し始めた。あのときに私のフィールドワークは始まったといえる。恩師の恩は海より深い」。

まことにその通りであった。私は現在もこの家系図を抱えて村に通っている。



展示会場風景

「英国フィールドワーク裏話」

伊藤 裕子

中部大学国際関係学部教授

夏至の頃、惹き込まれるような夜空を映し出すイギリス。同じ深い群青色の陳列棚に自分の研究図書が置かれた。本企画展では、研究をこのように「貴重なモノ」として見せる博物館という空間とその仕組み、そして数々の大規模展覧会を手掛けられた中野智章先生の手腕、鮮やかな展示のセンスに深く感銘を受けました。中野先生、そして博物館スタッフの皆様に深くお礼を申し上げます。

フィールドワークは自分にとっ

て図書館とは切り離せない。最も足繁く通ったのは大学院時代のサセクス大学図書館だが、二番目はロンドンの大英図書館（British Library [BL]）である。1997年までBLは大英博物館の中にあり、在学中は時折ここで文献調査をした。博物館入って左手の図書館の入り口をくぐるとマホガニーが鈍く光る重厚な空間が広がっていた。見るからに外国人の私がこの図書館で勉強することに違和感を感じているのか周囲の研究者から

は少し物音を立てただけで咳払いをされた。堅苦しい空間であった。

ハリー・ポッターでも有名なキングス・クロス駅のすぐ隣のセント・パンクラス駅に隣接して1998年に開館したのが、現在世界で蔵書数トップを争う巨大な新BLである。利用者はかつてとは違い、学生から一般人まで、また人種も様々で、誰でも平等に使うことができる。この図書館ではあらかじめ読みたい本を注文し、係員が部屋まで届けてくれる。私がよく使うのは「Rare Books

and Music (希少本・音楽) Reading Room」であり、1851年以前著作の古い本を閲覧することができる。イギリスの歴史上存在するあらゆる本や資料を蔵書するのがこの図書館であるが、どんな古い書物でも必要とあれば現物を手元で読める。ただごく稀であるが「destroyed (燃やされた)」とカタログに記載があり閲覧不可の本がある。これは第一次世界大戦中ドイツによる空襲で焼けてしまっ

た本だと司書から聞いた。戦禍の炎を想像し、犠牲になってしまった本のことを残念に思った。

かつて裸体主義について研究していた頃、やはりこのRare Booksリーディング・ルームを使っていた。最初は自由にどの席でも関係書籍を閲覧できた。しかし2000年代に入ると、同じ部屋の中ではあるが監視人や監視カメラ付きの特別な席でしか読むことができなくなった。希少本も同

じく特別席で閲覧するのであるが、19世紀半ば以後の資料でも裸体入りだと同じ扱いなのが意外であった。この方針転換はサセクス大学の図書館でも生じたので国を挙げての方針転換があったのだろう。しかしなぜ裸体主義を調査する自分が監視されなければならないのか。イギリスの現実世界では人々は裸体については比較のおおらかには思えたのだが。

今回の企画展をとおして、なるほど自分のフィールドはイギリスという現実の場所であることを改めて認識した。国際関係学部の学問とは、学問的切り口となる専門という縦軸と世界に広がるフィールドという横軸を多数併せ持っており、縦軸と横軸の拮抗点、すなわち学生が学べる専門とフィールドが無限に生成される環境にあることは本学部の大きなメリットである。



展示会場風景

「有形の弦楽器が語るシルクロード無形の音楽世界」

宗 婷 婷

中部大学国際関係学部准教授

昨年11月から12月22日まで開催された「中部大学国際関係学部 創設40周年記念展」において、私の所蔵品を展示させていただけたことは、中部大学大学院(国際人間学研究科)を修了した私にとって、大変意義深く、心から光栄に感じられる出来事でした。

展示品の準備段階から最後の片付けに至るまで、2002年から2007年の在学中に文化人類学の魅力を教えてくださった恩師の研究室に大切に保管されていた、世界各地で収集された「物」から受けた文化的刺激を思い出しながら、今回の展示物を選びました。

長年の調査の現場で集めてきた品々は、普段は自分の研究室で個人的に楽しんでいたものですが、今回の展示会やギャラリートークのおかげで、それらの背後に広がる豊かな世界を来場者の皆様に紹介することができ、大きな達成感と喜びを感じました。

私の研究分野は「音楽人類学」であり、日頃から非常に繊細に扱われるべき楽器類を多く扱っています。今回展示した楽器の多くは、現地から苦労して持ち帰った貴重なものです。さらに本展示では、陸のシルクロードの経由地であるギリシャの弦楽器「ブズーキ」、トルコの弦楽器「サズ」、そして博物館に寄付した中国新疆ウイグル族の弦楽器「タンブール」と「ドゥタール」を、初めて一堂に並べて展示する試みにも挑戦しました。

このような展示を通して、古代シルクロードで交流していた中華文明、ペルシャ文明、ギリシャ文明の文化的なつながりを、「弦楽器の響き」という形で再び感じていただけたのではないかと思います。今後はさらに多くの地域の弦楽器を加え、シルクロードにおける音楽交流の歴史を、楽器を通じて語っていきたくと考えています。実際、

ギャラリートーク後には楽器に関する質問も多く寄せられ、来場者の方々が興味深そうに細部まで鑑賞されている様子が印象的でした。

また今回の展示では、シルクロードの楽器に加え、長年研究調査を行ってきた西南シルクロード中国雲南省で収集した資料も多数展示しました。普段は研究室で見慣れている品々も、博物館の専門的な展示手法によって、その印象が一変し、まるで魔法のように輝きを増していました。それぞれの展示物が持つ最大の魅力が引き出されていたことが、特に印象に残っています。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

今回の展示を通じて、「物で世界を語る」ことの意義と、物が持つ無言の力をより多くの方々に伝えることができたと感じています。今後もこのような取り組みに、ぜひ積極的に協力していきたいと考えています。

2025年度 秋季企画展 関連 ギャラリートーク

日時 2025年11月5日(水) 14:00～

場所 中部大学民族資料博物館 シルクロード室

司会：中野 智章 (中部大学国際関係学部長・教授／
中部大学民族資料博物館長)

解説：中山 紀子 (中部大学国際関係学部 教授)

中野 智章 (同 教授)

伊藤 裕子 (同 教授)

宗 婷婷 (同 准教授)

参加：40人



ギャラリートークの様子 (右：中野学部長)

秋季企画展「国際関係学部創設40周年記念展～私とフィールド、私のコクサイ」の会期中に、展示に研究資料を出品いただいた国際関係学部の4教員によるギャラリートークを企画開催した。今回の展示は、海外の各地でフィールドワークによる研究活動を進める研究者が多い学部の特色の一つに焦点をあてることから選抜された内容となった。

司会の中野智章教授(学部長・博物館長)により、国際関係学部の成り立ちの概要説明、および創設当

時の海外研修や学部開催のシンポジウムの記録写真や、学部紀要や学生が作成した印刷物などを並べた展示ケース内容の紹介のあと、トルコの文化人類学研究者の中山紀子教授、エジプト考古学研究者の中野智章教授、イギリス文学・ヨーロッパ文化研究者の伊藤裕子教授、音楽人類学・民族学研究者の宗婷婷准教授の順で、各ブースに分かれて展示しているそれぞれの研究資料の解説をしていただいた。現地の人びととの交流の思い出、厳しい気候風土の

なかで行われる調査活動の苦楽などの話は、ふだんの授業とは別の研究者の姿を知ることとなり、参加者はそれぞれが対峙してきた課題テーマへの情熱を感じとることのできる時間となった。

展示資料には、これまでに国際関係学部の教員から寄贈を受けて、現在は当館の収蔵資料となっている民族資料も一部加えられ、今回の展示用に新たな観点から解説情報が追加された。博物館資料のさらなる紹介に活用していきたい。

(原田)



(中野学部長・教授)



(右：中山教授)



(中央：伊藤教授)



(宗 准教授)

展示会場で展示内容を解説する国際関係学部の先生方

3
2026 月
|
5
2026 月

企画展

特別講座(古典絵画) 2025年度受講生作品展 — 古典技法の現代作品への応用

Ⅵ 期間 Ⅵ 2026年3月19日(木)～5月29日(金)
(会期中に指導講師による講評会を実施：2026年5月27日)
Ⅵ 会場 Ⅵ 中部大学民族資料博物館 シルクロード室
附属三浦記念図書館 1階エントランス

主 催：中部大学民族資料博物館
企 画：下川 辰彦 (日本美術院特待
・中部大学民族資料博物館 外部専門委員)
：原田 千夏子 (中部大学民族資料博物館)

出品点数：34点
入場者数：1,060人



2025特別講座受講生作品展ポスター



1階エントランス 展示風景
(中央左：賛助出品作品)

2025年度は、前期と後期に各1点ずつ作品を制作するなかで、現代作家による制作工程のうち特別な彩色手法や画面作りなどの技法を、指導講師の下川辰彦先生から学ぶ内容となった。モチーフは人物、動物、植物、風景と様々であるものの、講師から学ぶ各工程を軸に、それぞれの構成を活かす形や配色を工夫するよう、制作をしながら構想を練ることで、新たな発見につながったのではないと思われる。その成果として、本展示の出品作品の仕上がりから、作者が表現の面白さを探し出していった過程を想像させるからである。古画や現代作品を模写した作品のタイトルには、「制作アレンジ」、「彩色アレンジ」と付記している。モチーフを借りながら、制作工程の段階で、指導講師からの指導をもとにして色層や金箔、銀箔の重ね方を新たに試みている点は原本の制作内容とは異なることからそう

した表記に講師と博物館側で判断し統一することにした。

絵画は、単に線を引き、そこに色を塗りつけるだけではない。また筆法のテクニックだけでなく、個々の特殊な画材の性質をよく認識し、丁寧な所作に気をつけながら下地の準備をし、基底材の表面と裏面から様々な工程を施すことで、画面全体の配色関係をコントロールするという緻密な工程手順をふむ。画材に触れる指先や掌での感触、匂いなど五感をフル活動させ、身体全体を使って、ときに繊細に、ときに大胆に調合や調整を行っていく、人間の経験から獲得した知と感性と体力を総合的に融合させて初めて実現する、非常に高度な創造行為だということをあらためて知ることとなった。同じ工程を経ても、作者に応じて多様な効果を生み出していくという、創造表現の不思議と魅力を、受講生の皆さんも実感したことだろう。

一回三時間を要する本講座では、終了後に精神集中したあとの指導講師の体力消耗された姿をしばしば目にすることがある。受講生一人ひとりの進行に応じて、実演による手本を交えた指導に心を配り、時間内に休憩をとることさえ忘れて向き合っていたのである。また受講生の多くが、講師の説明を漏らすまいとして必死にメモをとる姿が教室では日常風景となっていたことも添えておきたい。活動報告として開催した、会期中の作品講評会においても同じ光景であったことはいうまでもない。本講座「古典絵画」の企画が、地域の学びの場としてその学習意欲に応える、質と内容を指導講師が維持され、またその熱意を受講生の皆様が受け取りながら学ぶ喜びを発見されてきた結果だと思っている。(原田)



展示会場風景



指導講師による講評会の様子（中央：下川辰彦先生）

11
2025 月

教育普及活動

CAAC 授業「旅と文学」内見学解説

Ⅵ 日時 Ⅵ 2025年11月14日（金）

授業担当：岡本 美和子（CAAC 授業「旅と文学」講師）

作品解説：原田 千夏子（中部大学民族資料博物館）

参加者数：11人

内 容：所蔵資料について解説と鑑賞



館職員による作品解説の様子

解説題目：『源氏物語絵巻』～彩色に託された思いと時代性

- ・大和絵・絵巻の様式的特徴
- ・国風文化
- ・平安時代の色（植物染料、顔料、金銀）
- ・祈りのための絵
- ・四季と仏教〔無常観〕

対象作品：中部大学蔵の大和絵の模写作品等

《模写 源氏物語絵巻「柏木（三）」》（原本 徳川美術館本）

《模写 扇面古写経絵図》（原本 東京国立博物館本）

《模写 平治物語絵巻 六波羅行幸巻》（原本 東京国立博物館本）

日本画の顔料と染料の重ね塗りの色見本パネル

（制作：中部大学民族資料博物館）

11
2025 月

施設利用

学校法人中部大学保育園 ちゅとらのおうち園外保育見学

Ⅵ 日時 Ⅵ 2025年11月21日（金）

実 施 園：学校法人中部大学保育園 ちゅとらのおうち

参加者数：17人

内 容：展示室見学、民族衣装体験、民族楽器体験



学校法人中部大学保育園「ちゅとらのおうち」
園外保育・見学風景

2
2026 月

施設利用

小学校スタンプラリー見学

Ⅵ 日時 Ⅵ 2026年2月6日（金）

実 施 校：春日井市立北城小学校

（担当／国際・地域推進部地域連携課）

参加者数：79人

内 容：展示室にてスタンプラリー式鑑賞



小学校スタンプラリー見学風景

展示室における学習スペースの設置について



新たに設けた学習スペース風景

近年では、学園の保育園児の利用機会も増えてきたことを踏まえ、館内で閲覧できる図書の選定に絵本を加えてみることにしました。世界の民族文化にちなむ暮らしの様子を、イラストを通じて身近に知ることができる点では、対象は子どもに限らず、大人の目線からも興味深いものと考えています。

博物館事務局は、2025年3月より同建物1階から2階の展示室内に移動しました。

これにともない、館内の「体験実習室」は閉室し、代わりに図書コーナーとそれに付随していた学習スペースを、常設展示室の一隅に移設しました。学習スペースには、新たに可動式のテーブルと椅子を設置しました。グループ学習に、また見学途中の休憩地点としてご利用いただくことができます。

民族資料博物館では、学内の授業利用の他、小中学校や高校の見学も年間を通して受け入れています。

❖ 絵本の選定に関わったスタッフの声 ❖

ライフスタイルメディア編集部

『しかけ絵本
めくって楽しむ 世界地図』

JTBパブリッシング(出版)、2022年

子どもから大人まで楽しめる「しかけ絵本」です。この本は世界地図の中に各地の特色、動物、歴史などがイラストで描かれていて、それぞれのページにしかけの小窓がたくさん設けられています。指先を使って小窓をめくすることで、子どもの心身の発達に大切な五感（視覚・聴覚・触覚など）を刺激することで、子どもの好奇心や想像力を養おうというねらいもあるようです。なんと100以上の小窓のしかけがあります。ぜひ挑戦してみてください。

エルサ・ベスコフ 作・絵
おのであゆみに 訳

『ペレのあたらしいふく』

福音館書店、1976年

主人公の少年が自分にぴったりの服を作るために大人の手を借りながら、羊の毛で糸を紡ぐという昔ながらの手作業による服作りをするお話です。各ページでは、素材が形を成していく工程を美しいイラストとともに眺めることができます。

当館には、絵本に描かれているような、羊の毛を刈るはさみ、木製の糸紡ぎ車、糸まき棒など、東ヨーロッパの暮らしの道具を展示しています。絵本と展示資料を合わせて鑑賞していただくことで人々の生活風景がよりイメージしやすくなるのではないかと思います。

クリスティーナ・キンテロ文
サラ・ゴンサレス 絵/星野 由美 訳

『せかいの みんなの パン・パン・パン!』

ぼるぶ出版、2024年

世界にはいろいろなパンがあります。「パン」の見た目や形、食感など、国や地域によって、実はとても違いがあることをどれくらいご存知でしょうか？

この絵本では、パン作りの工程が擬音語や韻を踏んだ言葉によって、リズムカルに表現されています。声に出して読むと、パン作りの楽しさがより感じられます。

また、世界のパンの紹介もあり、日本の「パン」も世界のうちの1つにあり、特色のあるものなのだと気づかされます。「パン」の香りを想像しながら外国のどこかで生きる人びとへ思いをめぐらせてみませんか。

(梶藤・川島)

2026

行事案内

CHUBU UNIVERSITY MUSEUM OF ETHNOLOGICAL ART

◇ 2026 秋季企画展

2026 年度秋季企画展 「発光生物のエスノバイオロジー」

2026年10月30日(金)～12月25日(金) 〈ギャラリートーク〉11月4日(水) 14時より(予定)

◇ 2026 企画展

「特別講座(古典絵画) 2026 年度 受講生作品展」(仮称)

2027年春季予定